

氏名	たけ なか とし ひこ 竹 中 利 彦
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 261 号
学位授与の日付	平 成 15 年 11 月 25 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	デカルトにおける知性と感覚経験、情念との関係 ——数学、自然学、道徳を通して——

論文調査委員 (主査) 教授 伊藤邦武 助教授 出口康夫 助教授 川添信介

論 文 内 容 の 要 旨

本論はデカルトの哲学体系において「知性 (intellectus)」の果たす役割を厳密に位置づけようとする研究である。デカルトの哲学が人間の学問的探求における知性ないし理性の役割を最大限に強調する、いわゆる「合理主義」の哲学であることは、改めて指摘するまでもない哲学史の常識である。しかしながら、この知性とそれに対比される感覚や情念との関係については、これまでの研究において概略的な説明以上のつっこんだ解釈はほとんど見受けられなかった。本論は『省察』や『哲学原理』に代表される、デカルトの体系的叙述における知性論、感覚論などを踏まえつつ、むしろ彼の学問的探求の具体的な実相が提示されている、『方法序説』における三試論や『情念論』の詳細な分析を通じて、これらの知性論、感覚論の実際の適用の現場の姿を明らかにしようとしたものである。本論はまた、こうしたデカルトの具体的な知性論、感性論の特徴をさらに浮き彫りにするために、デカルト哲学の修正を試みたともいえるマールブランシュの議論を分析し、それとの対比において理解される、デカルトの立場の特異性についても指摘しようとする。本論の全体の構成とその内容とは以下の通りである。

第1章「知性と数学」では、デカルトにおいて基本的に数学が諸学問の範型であるとされる点について考察し、そこから知性についていかなる特徴と問題関心が浮き彫りにされるかが論じられる。

第1節「伝統的論理学と数学の批判」では、『方法序説』や書簡に見られる、デカルトのアリストテレス流の伝統的論理学と当時新興のアラビア伝来の代数学にたいする批判を取り上げて、そこから間接的に理解されるデカルトにとっての知性の価値を特定する。デカルトの知性観が初期の数学的探求に源をもつことはよく知られており、さらにそこにおいて数学的方法のもつ新しい真理の発見という分析的視点が重視されていたことは広く指摘されていることであるが、本論ではデカルトの従来の数学観にたいする不満の焦点が、むしろ推論の「機械的性格」にたいするものであったと理解することによって、彼の数学の重視が、あくまでも知性の非機械的働きの会得にあったとする。すなわち、数学の重視はその推論の明確さよりも、知性の錬磨を通じた精神の創造的な働きにたいする自己理解に重心が置かれていたとするのである。第2節『規則論』と『方法序説』におけるデカルトの「方法」は前節の分析をうけて、彼の方法論の代表的著作である『精神指導の規則』と『方法序説』における方法の規則の具体的な分析を行う。この分析の結果、これらの規則において主要な方法をなすのは、「直観」と「演繹」の方法であるとしても、デカルトは後者を前者の派生的な形態と位置づけることによって、数学の本質を証明ではなく判断に見るという特異な数学観を保持していたことが明らかになる。これは、推論における形式的な確実性とは区別される直観的な確実性の追求ということを意味している。第3節『幾何学』におけるデカルト的知性では、デカルトの数学者としての代表作である三試論のうち的一篇「幾何学」の議論を概観し、特に「単位」「比例」「作図」の概念の説明に注目することによって、前節の知性観の具体的な表明を跡づける。デカルトにおいては幾何学と代数学とは「比例と順序」を一般的に扱ういわゆる「普遍数学」へと総合されるが、このような抽象的数学が要請される根拠は、それによって数学的判断の対象の「単純さ」が確保されるという点にあったことが明らかになる。本節ではこの単純性の意味を掘り下

げるとともに、さらに、デカルトの「幾何学」を下敷きにしたマールブランシュの数学論を詳細に分析することによって、このことがデカルトの数学観の特徴であることを傍証する。

第2章「感覚と自然学」では、第1章で特徴づけられた知性が、自然学的探求においてどのような役割を果たすこととなるかが考察される。自然学的探求においては、感覚、経験、実験などの純粹知性とは異質な精神の働きが重要となるが、これらの働きと知性の働きとの具体的な関係を、デカルトの個別的な科学研究のなかで突き止めるのが、この章の目的である。

第1節「『第六省察』における感覚の役割」では、「第六省察」における物質的事物の存在証明と心身の合一の証明において、デカルトが明証性の規則とは異なった真理基準を容認していることが確認されたうえで、感覚的経験を利用する判断の正否が「自然の制定」に依拠した合理性の判断によって決定されるものであることが明らかにされる。第2節「『屈折光学』での視覚経験」では、『方法序説』の三試論のひとつ「屈折光学」における物体の幾何学的性質の認識の説明が、このような自然の制定の具体的な働きの解明であると解されたうえで、この議論のはらむデカルトの二元論にとっての困難を列挙し、その解消の方法が検討される。本論ではそのために、デカルトの「自然の制定」の考えを継承したと考えられるマールブランシュの「自然的判断」の理論を分析し、そこにおいて感覚そのもののうちで非知性的に働いている判断と、意志にもとづく能動的判断が区別されている点に注目し、このような考えが「屈折光学」におけるデカルトの立場ときわめて近似的であり、また困難の解消のために積極的な意味をもつことを論証する。第3節「方法と経験」では、こうした二段構えの判断が、まさしくデカルトの具体的な科学的探求の方法であったことが、もうひとつの試論である「気象学」における虹の分析において示されるということが論証される。デカルトは虹という現象を光の本性についての直観に還元していく段階において、複数の経験的事実への参照を行うが、一方でその結果得られた光の本性から逆に、アプリオリな議論で虹の実際の数学的性質が導かれることを示す。ここには自然の制定に依拠した経験的判断と数学的純知性的な判断との相互検証の方法が見られるわけであるが、本論はこの方法こそ、「第六省察」で認められたところの、明証性とは区別される判断の合理性の實質的内容であるとする。

第3章「情念と道徳」では、デカルトの後期の著作『情念論』の分析を通して、知性と情念の関係を考察するとともに、この著作において彼がいかなる種類の道徳論を構築しようとしたかを分析する。第2章がいわゆる科学における知性の役割の特定であるのにたいして、本章は道徳における知性の役割を分析することになる。

第1節「ダマシオの「理性を基礎付ける情念」」では、『デカルトの誤謬』で名高い現代の脳神経学者ダマシオの議論を取り上げ、現代の情念論から見られたデカルトの情念論批判が概観される。ダマシオの議論の要点は、人間の知性ないし理性や道徳的判断が情念という基盤にもとづいて機能するものであり、デカルトのいうように単独では機能できないということにある。本章では以下、このような批判がデカルトにたいする正当な批判であるかどうかを吟味することを課題としつつ、彼の情念論の実際の議論を分析することにする。第2節「道徳と情念の関係」では、『情念論』における情念の定義、その善用というデカルトの道徳論の課題、そこで前提されている身体の欲望と精神の意志作用の関係についてなどの、基本的な前提と理論構造とが整理される。第3節「情念の発生に対する精神の介入」では、デカルトによる情念の発生のメカニズムの説明を分析し、情念と身体を取り巻く状況の関係が固定的なものではなく、意志によって間接的にはあるが介入可能なものとして想定されていることが指摘される。とくに、この意志の介入の可能性の根拠として、脳内の器官の運動と情念との関係を「自然の制定」と見て、この判定が知性によって理解可能になるかぎり、それにとって変わるべき情念の可能性が認識されるという議論が提出されていると解釈する。第4節「『欲望の統御』」では、こうした意志の介入によって目指されるべき新たな情念が、知性によって認識できる最善のことをなすという意味での「徳」に付随する、「精神の内的感動」あるいは「知的喜び」とされている点が分析される。そして、デカルトの情念論では、いわば知性による欲望の統御がそれ自身ひとつの喜びの情念を生み出し、幸福をもたらすという、可塑的でダイナミックな構造を人間の情念に付与しているということが指摘される。第5節「ダマシオとの比較」では、以上の考察にもとづいたデカルトとダマシオの比較がなされる。そして、デカルトの情念論はダマシオのいうように、精神と身体、知性と情念の画然とした分離を前提にしたものではなく、それらの相互作用を全面的に容認したうえで、その相互作用を利用して情念の統御の可能性を追求したものであることが指摘される。

最後に、以上の考察から結論として、デカルトの知性にかんする次のような指摘がなされる。数学的对象に代表される知

性の判断の対象の単純性は、明晰判明な認識の領域を自己限定することを可能にし、このことによってかえって明晰性をもたず確実とはいえない認識の領域の不確実性の程度を合理的に判断することができる。こうした合理性の指標を補助手段として、知性はその認識の対象領域を徐々に拡張することができる。自然学ならびに道徳論への探求の進展は、こうした精神の探求の具体化の作業が、知性の領域の自己限定であるとともに自己拡張でもあるという、二重の性格を明らかにする過程である。したがって、知性を出発点とするデカルトの哲学体系は、自己限定と自己拡張という二面的な運動をはらんだ、きわめて人間的な精神の働きの提示であるというのが、本論の最終的な結論である。

論文審査の結果の要旨

本論は西洋近世哲学における合理主義の代表的な思想家とされるデカルトの哲学体系における「知性」の役割を分析しようとした論文である。デカルトが合理主義の祖とされる以上、彼の「知性 (intellectus)」ないし「理性 (ratio)」をめぐる内外の研究は枚挙に暇がないほどであるのは当然であり、ある意味ではほとんどすべてのデカルト研究が、その知性論ないし理性論研究であるといってもよいかもしれない。このようなデカルト研究の蓄積にたいして、本論がその独自性をもつとすれば、それは次の二点からなると思われる。(一) 一般にデカルトのテキストは『省察』や『哲学原理』に代表される、狭義の意味での哲学、形而上学を論じたテキストと、『方法序説』を序文とする『三試論』や『情念論』のように、数学、自然学、生理学、道徳論などの具体的な探求成果を示したテキストに二分されるが、論者は本論でほとんど専ら後者のテキストを題材にすることによって、彼の哲学探究の実質的な成果のほうからその知性論の内実を明らかにしようとしている。(二) デカルトの哲学体系はその発表と同時に直ちに大きな影響力を発揮することになったばかりではなく、その影響はその後の全哲学史を通じて大きな力をもち、今日の心の哲学や精神の理論にも及んでいる。その影響は極めて好意的な共感から鋭い批判までかなりの幅をもつものであるが、論者は本論において、デカルトの数学と自然学にかんしては彼の後継者ともいうべきマールブランシュとの対比を行い、その情念論にかんしては現代の脳神経学者ダマシオとの対比を行うことによって、デカルトの立場の特徴を鮮明にする工夫をほどこしている。前者のマールブランシュはデカルトの同調者であり、後者のダマシオは批判者であるが、同調者としてのマールブランシュの間にも見られる差異と、批判者のダマシオの間にも見られる共通点に注目することによって、デカルトの立場の特徴をより鮮明に明らかにすることができると、というのが論者の基本的な考えである。

本論は以上のようにデカルトのテキストの内在的な分析と比較研究を複合した研究であるが、そのテキスト分析は詳細を極めており、先行研究にたいする調査も行き届いている。また、デカルト研究の歴史的堆積を勘案すると、新しい研究によって独創性を発揮することはかなり困難なことであるが、本論は上のような独自の視点を採用することによって、既に論じ尽くされた感のあるデカルトの哲学思想にいくつかの新しい光を当てることに成功している。その主な点として次の三点を挙げることができる。

(一) 論者の関心は、既に述べたように『三試論』や『情念論』など、デカルトの具体的、個別的な探求のなかに、感性や情念との密接な関係のもとにある知性がどのような働きをもつものとして了解されているか、ということを探ることにあるが、そのために詳細に分析された「幾何学」「屈折光学」「気象学」『情念論』の考察のなかでも、特に「気象学」における「虹」の分析にかんする考察において、もっとも独自の成果がもたらされている。デカルトは虹の分析において、現象として観察される虹のさまざまな特性から出発して、光の本性へと遡行的に推論を展開したのちに、逆に光の本性から数学的な議論によって虹の現象の必然性を説明するという二重の方法を採用しているが、この議論の意味を知性と感覚経験の関係という観点から認識論的に整理したのは、これまでにあまり例のない論者の独創である。

(二) デカルトとマールブランシュの比較についてはこれまでもいくつかの研究があるが、数学論と屈折光学という二つの分野にかんしてこれを行うことによって、純粹知性の領域である数学と知性と感性の協同の領域である知覚経験という、知性と感性の関係に直結する問題意識からこの二人の思想を比較するという試みも、他に類を見ないものである。論者はこの比較研究によって、数学論にかんしてデカルトの純粹知性の考えをさらに徹底し、その結果として心身分離の立場をも徹底することになったマールブランシュにおいては、知覚経験のような知性と感性の協同が必要となる精神の働きにおいて、心身合一的存在としての人間における知性や意志の積極的介入の説明ができないことを確認しているが、このことは同時に、

デカルトの知性論のもつ鋭利かつ柔軟な視点というものを鮮やかに浮かび上がらせることになっている。

(三) デカルトの情念論、道徳論については、一般に、情念のうちでももっとも強い力を発揮する欲望の情念を、知性的な反省と意志の力とによって理性的に善とされる行為へと向かわせることを主眼とした、ストア主義的道徳論と理解されるのが普通であり、ダマシオの『デカルトの誤謬』もこの了解のもとでデカルト批判を行っている。これにたいして、論者はデカルトの道徳論とストア主義との結論における共通性は認めるものの、それを基礎付ける情念論において情念の発生にかんする詳細な分析が用意されている点に、重大な相違を見る。デカルトは情念の発生に関与する要素として、記憶、習慣、体質、精神力という四つの要素の複雑で可塑的な相互作用を認めているが、こうした生理学的研究にもとづく情念のダイナミックな生成のメカニズムの分析は、決して現代の神経学的分析に対立するものではなく、その原型を提供するものであるというのが論者の主張である。このような情念の発生の理解とそれを知性的に利用した道徳論の可能性への注目、デカルト哲学の現代的意義の再確認のためにも重要な論点であろう。

以上のように、本論はデカルトの具体的な研究成果に密着して解釈するという立場を採用することによって、この哲学体系に含まれる今なお新鮮な議論を掘り起こすことに成功しており、そのために費やされた文献読解の労は十分に多とすべきである。ただし、本論においてもさらにつっこんで追求されるべきであったと思われる点もある。たとえば、論者は「第六省察」における「自然の制定」という概念を重視し、この概念が『情念論』においても前提されているばかりでなく、「屈折光学」における「自然の幾何学」という概念もほぼ同内容のもつと理解して、論文全体の議論を展開しているが、この概念のもつ多様性に注目するならば、デカルトにおける知性と自然の関係について、さらに行き届いた分析ができたのではないと思われる。また、「幾何学」における幾何学、算術、代数学、普遍数学の関係についても、最近の数学史研究を参照すれば、より明快な見通しが得られたと思われる。これらの点について、論者の今後のさらなる研鑽を期待したいと思う。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年8月25日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。